

## 要 旨

本研究は、目的に応じて本を選んで読み、読んだ本についての自分の考えを伝えることのできる児童を育成するための学習指導の在り方を探ったものである。紹介したい本を取り上げて説明する言語活動を、単元を貫く言語活動として位置付け、そこに話し合う活動や書く活動を組み込み、読みの交流をさせる。さらに、読み聞かせやアニメーションも取り入れ、本への興味・関心を高める。これにより、目的に応じた読書に取り組み、読んで考えたことを伝えることができるようになってきた。

〈キーワード〉 ①言語活動 ②目的に応じた読書 ③読みの交流

### 1 研究の目標

目的に応じていろいろな本を選んで読み、自分の考えを伝えることのできる児童を育成するために「読むこと」領域の文学的な文章の学習において、効果的な言語活動を取り入れた指導の在り方を探る。

### 2 目標設定の趣旨

平成20年3月に示された学習指導要領では、児童の思考力、判断力、表現力を高めるために言語活動を充実させて、言語の能力を高めることが求められている。そのため国語科では、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」のそれぞれの領域の内容に様々な言語活動例が位置付けられている。また今回の国語科の改訂の主な内容の一つとして、読書活動の充実が挙げられる。目的に応じて本や文章などを選んで読んだり、それらを活用して自分の考えを書いたりすることがこれまで以上に重視されている。

平成23年度の佐賀県小・中学校学習状況調査の5年国語の結果では、「読み取った内容について自分の考えをまとめる」問題において「おおむね達成」の基準を下回っていた。このことから「読むこと」領域では、内容を読み取ることと、読み取った内容について自分の考えをまとめることに課題があると考えられる。加えて児童生徒意識調査において、「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている」と答えた5年児童は約58%と多くはない。一方で、5年児童の約83%の児童は読書が好き、またはどちらかといえば好きと回答しており、読書を好む傾向がうかがえる。読書への関心は決して低いわけではない。このことから目的に応じていろいろな本や文章を選んで読んだり、読んだ内容について自分の考えをまとめたりする経験が少なく、ただ漠然と読んでいるのではないかという児童の実態が浮かび上がってくる。

そこで、本研究では研究テーマ、研究課題を受け、文学的な文章の学習において、言語活動を工夫して、児童の読書活動が深まるような指導の在り方を探る。複数の本を読む必要がある言語活動を中心にすることで目的をもった読書が可能となり、さらに話し合う、書く活動を組み合わせることで、自分の考えを伝えることができるようになると考え、本目標を設定した。

### 3 研究の仮説

文学的な文章の学習において、本を活用する言語活動を仕組めば、読書の範囲を広げ、多様な目的に応じていろいろな本を選んで読んだり、読んで感じたことを伝えたりすることのできる児童が育つであろう。

## 4 研究方法

- (1) 読書に関するアンケートの実施と読書指導についての理論研究
- (2) 効果的な言語活動の取り入れ方についての理論研究
- (3) 仮説の検証を目的とした授業実践及び考察

## 5 研究内容

- (1) 読書に関するアンケートを実施し、児童の実態をつかむと共に、読書活動を充実させる指導について先行研究や文献などを基に理論研究を行う。
- (2) 読書指導に関わる効果的な言語活動の取り入れ方について、先行研究を基に理論研究を行う。
- (3) 所属校の3年生において、文学的な文章「木かげにごろり」（3時間）と「手ぶくろを買いに」（3時間）を用いた授業実践を行い、仮説を検証し、手立ての有効性を示す。

## 6 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

読書指導に際して寺井らは、「読み手としての主体性を育てること、目的をもち意欲的に読書をする態度を育てること、読書をする喜びが分かり、進んで読もうとする読書意欲を高めることなどが大切」<sup>1)</sup> だと述べている。また、読書意欲を高め、習慣化させるために必要なこととして、村松は、「孤読（個に閉じた読書）から互読（他者に関われた読書）へ」<sup>2)</sup> と述べている。言い換えると「好きな本を各々が黙って読んで終わりにするのではなく、他者と読みを交流すること、その中で多様な解釈や視点に出会うことが重要」<sup>3)</sup> だと述べている。また、アニメーションについて岩辺は、「一つの本を読み合っ、その物語の森を仲間とともに歩き回るように、ゲームの手法を取り入れることによって楽しみ、『本って、おもしろいな!』という心地よい体験をさせ、読書の喜びを広げる試み」<sup>4)</sup> だと述べている。

これらの考えを受け、目的をもって複数の本を読む必要がある言語活動を中心にし、話し合う、書く、紹介する活動を組み合わせることで、読みの交流を図ることができ、自分の考えを伝えることができるようになると考えた。また、読み聞かせやアニメーションも取り入れることで、児童の読書範囲を広げ、日常生活における読書活動の活発化にもつながると考えた。

- (2) 研究の構想

### ア 単元の構想

本を活用する言語活動として、紹介したい本を取り上げて説明する言語活動を、単元を貫く言語活動として位置付ける。自分の考えを伝えることができるようにするために、紹介する観点をつかむための話し合う活動や、紹介したいことを書く活動を取り入れ、本を紹介する活動につなげる。目的に応じていろいろな本を選んで読めるようにするために、単元のめあてをつかみ目的をもった並行読書に取り組ませることや、読み聞かせ、アニメーションを取り入れ、本を読むことへの興味・関心を高める。このような単元計画で指導することによって、自分の考えを伝えることができ、目的に応じていろいろな本を読むことのできる児童の育成を図る（図1）。

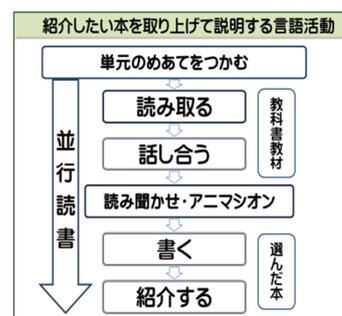


図1 単元の構想

### イ 検証の視点と具体的な手立てについて

- (ア) 【検証の視点I】話し合う、書く、紹介する活動による、自分の考えを伝える力の高まり  
単元に、紹介する観点をつかむための話し合う活動や、紹介したいことを書く活動を取り入

れて、その後の本を紹介する活動につなげる。話し合う活動では、自分の考えをワークシートに記入し、ペア、全体で話し合いをさせ、読みを交流させる。これらの活動を通して、自分の考えを伝える力を高めることができたかどうかを検証する。

- (イ) 【検証の視点Ⅱ】めあてをつかませての並行読書、読み聞かせやアニメーションによる、目的に応じていろいろな本を選んで読む力の高まり

単元の導入段階で、言語活動の見通しをもたせ、本の紹介をするために、どのような本を読んでいくのかを明らかにし、並行読書に取り組みさせる。児童には、読書記録カードを持たせ、読んだ本の記録をつけさせる。教科書教材の学習が終わった段階で、さらに、読書への興味・関心を高めるために、関連する本の読み聞かせ、アニメーションを行う。これらの活動を通して、目的に応じていろいろな本を選んで読む力を高めることができたかどうかを検証する。

### (3) 検証授業の実際と考察

#### ア 検証授業の単元の概略

検証授業は、11月に「民話のおもしろさを伝えよう」（教材名「木かげにごろり」東京書籍3年下）、1月に「お気に入りの作家の本を紹介しよう」（教材名「手ぶくろを買いに」東京書籍3年下）の2単元で行った。

#### イ 【検証の視点Ⅰ】話し合う、書く、紹介する活動による、自分の考えを伝える力の高まり

##### (ア) 話し合う活動について

「手ぶくろを買いに」の第5時の学級全体での話し合いの様子、抽出児のワークシートを基に分析し、考察を述べる。以下に抽出児のプロフィールを記載する（表1）。

表1 抽出児のプロフィール

A児	B児	C児
自分の考えを記述し、積極的に発表することができる。読書はとても好きで、ほぼ毎日図書館に行って本を読んだり、借りたりしている。好きな作家、シリーズがある。	自分の考えを記述することはできるが、人前で発表するのは苦手としている。読書はまあまあ好きだが、図書館には週1日行く程度である。	自分の考えを記述することが苦手で、助言が必要なことがある。自分の考えがまとまった時は発表することができる。読書はまあまあ好きだが、授業以外では全く図書館に行かない。

第5時は、「手ぶくろを買いに」を簡潔にまとめるための話し合いを行った。本の内容を簡潔に紹介する方法として、「(中心人物)が(出来事)によって(変わる)話」という文型を使って、一文で書かせる方法を学ばせた。その後、「手ぶくろを買いに」ではどのような一文にまとめられるか自分の考えを書かせた。全員が自分の考えをもって、考えを伝えさせるために、最初にペアでの話し合いをさせ、その後、全体での話し合いにつなげた。ここでは、全体での話し合いの様子を挙げる（次頁資料1）。

最初に一文を書かせた時、C児は出来事のところに「手ぶくろを買いに行くこと」と書いていた（次頁資料2）。学級全体としてもほとんどがC児と同様で、きつねの手を出したにも関わらず、手ぶくろが買えたことを書いていた児童はほとんどいなかった。話し合いを進めていく中で、A児の発言（次頁資料1の下線部a）を受けて、C児は、間違っただけの手を出しても手ぶくろを買えたということが大事だということに気付き発言した（次頁資料1の下線部b）。A児の意見をきっかけに、学級全体が、きつねの手を出したにも関わらず手ぶくろを買えたことによって、子ぎつねが人間は怖くないと思うのだから、「手ぶくろを買ったこと」だけでは足りないことに気付くことができた。C児は話し合い後、次頁資料2のように、ワークシートに、「まち



でのまとめ方をつかんでいった。さらに、ワークシートは発表原稿を兼ねたものにするこゝで、短時間で取り組めるようにした。また、一文以外のところは自分の思いを自由に書けるようにすることや、2冊まで紹介してよいことにすることで、多くのことを伝えたいと思う児童も意欲的に取り組めるように工夫した。

C児はお気に入りの作家として宮西達也を選び、お薦めの本として『帰ってきたおとうさんはウルトラマン』を紹介することにした。この物語は2人のお父さんの話が交互に出てくるので、C児は、中心人物がどちらなのかが分からずにいた。お父さんという視点でみると2人とも中心人物だとアドバイスすると、その後は、一文にまとめることができていた。

A児は、学級のみならずへの一言で、「宮西達也さんの本は、愛や友情の物語が多いので、みなさんもぜひ読んでください」と呼びかけていた（前頁資料3）。このように、同一作家の本を選んで読んだことで、作家の特徴に気付いた児童も見られた。

学級全体で見ると、児童が選んだ本が、言葉遊びの内容を含んだものだったために、一文で表現しにくい内容のものもあった。しかし、全員が、自分が選んだお気に入りの作家のお薦めの本を一文で表して、紹介することができた。

(ウ) 話し合う、書く、紹介する活動を組み合わせることによる自分の考えを伝える力の高まり

授業後の抽出児の感想、アンケートを基に分析し、考察を述べる。

B児は人前で話すことが苦手で、授業中、答えが分かっているにもかかわらず、手を挙げることは少ない。しかし、授業後の感想から、紹介する活動に対して、満足感を感じていたことが分かる（資料4）。話し合いをすることで、一文で表す方法が分かり、さらに事前に教師に見てもらったことで、自信をもって発表することができたからだと考えられる。

授業後のアンケートでは、書く活動につなげるための話し合う活動について、多くの児童が役に立ったと回答しており、児童は、話し合う活動の有効性を実感することができた（図2）。個々の活動につながりをもたせたことで、児童にとって学習の目的が明確になり、意欲的に取り組めたと考える。さらに、人前で話すことが苦手な児童にとっては、書くことで、安心して発表することができ、書くことが苦手な児童にとっては、話し合うことで、どんなことを書けばよいのかをつかむことができたと考えられる。これらのことから、本の紹介活動における話し合う、書く、紹介する活動を組み合わせることは、自分の考えを伝える力を高めることにおいて有効であったと考える。

- ・ 発表する時は、他の人に読んでほしいと思いつながら発表しました。これからもたくさん本を読んでいきたいと思つます。（A児）
- ・ 発表するときはどきどきしてつたけど、とても楽しかつたし、ちゃんとつてよかつたです。一文でまとめる時、先生がアドバイスをくれてうれしかつたです。（B児）
- ・ お気に入りの作家を探したり、読んだり紹介したりするところがとても楽しかつたです。ぼくはこれまでよりも、好きな作家の本をたくさん読むようになりました。（C児）

資料4 授業後の抽出児の感想

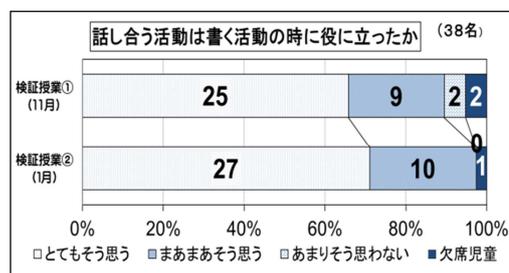


図2 話し合う活動の有効性

イ 【検証の視点Ⅱ】 めあてをつかませでの並行読書、読み聞かせやアニメーションによる、目的に応じていろいろな本を選んで読む力の高まり

(ア) 書き手を絞って読む活動について

1月に実施した「お気に入りの作家の本を紹介しよう」の単元では、お気に入りの作家を見つけ本を読み、その中でお薦めの本を1～2冊紹介させた。お気に入りの作家については、3年時

でに学習したことのある教科書教材の文学的文章の作者の中から見つけさせるようにした。ここでは、抽出児の読書量、授業の様子、アンケートや学級全体での読書量を基に分析し、めあてをつかませての並行読書についての考察を述べる。

単元学習に入る前に、これまで学習してきた文学的文章の作者について、どの程度覚えているかを調査したところ、覚えていたのは一人平均2作品程度で、それも3年時に学習したものが多かった。1、2年生の時に学習したものは、物語の内容は大筋で覚えていても作者が誰だったかは覚えていなかった。また、本を借りる時に決め手となる理由として「その本の作者が好きだから」と答えた児童は1名だった。つまり、作者を意識して本を選んで読んでいる児童は少ないことが分かる。

授業では、単元のねらいをつかませた後、一人一人に読書記録カードを持たせ、並行読書に取り組ませた。3年下までの教科書教材に載っている文学的文章は13作品ある。その中で一定の数の本が用意できた12名の作者の本を、一作者当たり4～10冊、合計100冊の本を公立図書館から借りてきてコーナーに設置した。最終的には学校の図書室から自分で探して読むことを目指していたので、一作者当たり10冊までに限定した。

抽出児A、B、C児は共に、お気に入りの作家として、宮西達也を選んでいった。2年時に学習した「ニャーゴ」が好きで宮西達也を選んだ児童が多く、互いにおもしろかった本についての情報交換をしながら読み進めていた。コーナーには宮西達也の本を9冊用意していた。

B児は、10月の事前調査では、授業以外で1週間に図書室に行く回数は1回程度で、読書への関心はそれほど高くはなかった。しかし、本単元で宮西達也の本を選んで読んでいくうちに、そのおもしろさに気づき、コーナーにある宮西達也の本を読み終えた後は、図書室に行って探して読み、3週間の単元学習の間に、合計26冊の宮西達也の本を読むことができた。学習後の2月の調査では1週間で図書室に行く回数は、ほぼ毎日と答えており、この学習をきっかけに、読書への関心が高まったことが分かる。

C児は、10月の事前調査では、授業以外で図書室には全く行かないと答えていた。しかし、C児もコーナーにある9冊は全部読んで、1冊は図書室に行って読んでいた。C児は授業後の感想に「お気に入りの作家を探したり、読んだりするのは楽しかった」（前頁資料4）と述べており、目的をもって本を選び、読み進めることができていた。

学級全体で見ると、3週間の期間でお気に入りの作家の本を一人平均9冊読んでいた。また、お気に入りの作家を選ぶ前に読んだ複数の作家の本も含めると、一人平均19冊読んでいた。本によっては読みごたえのある厚い本もあり、単純に冊数で比較できない部分もあるが、お気に入りの作家の本を紹介するという目的をもって本を選び、読み進めることができたと考える。学習後のアンケートでは、「今回の学習で見つけたお気に入りの作家の本を、これからも読みたいと思うか」という質問には、全員が「読みたい」と答えた。また、学習後、図書室で本を選ぶ際に、「川端誠さんの本を読みたいのですが、どこにありますか」等と質問する児童が見られるようになり、作者名から本を選ぶ児童が増えてきた。お気に入りの作家の本の紹介をするという目的をもって、並行読書に取り組ませたことで、児童は、書き手を絞って本を読むことができるようになったと考える。

以上のことから、めあてをもって並行読書に取り組み、本の紹介につなげることは、目的に応じていろいろな本を選んで読む力をつけるのに有効だと考える。

#### (イ) ジャンルを絞って読む活動について

11月に実施した「民話のおもしろさを伝えよう」の単元では、世界各国の民話を読んで、その中から好きな民話を1冊選んで紹介させた。ここでは、授業の様子、アンケートや読んだ冊数を基に分析し、主に読み聞かせ、アニメーションについての考察を述べる。

まず、民話のおもしろさを伝えるために、複数の民話を読み、その中からお薦めの一冊を選んで

紹介させるといふ単元のねらいをつかませた。その後、朝の読書タイムや図書の時間などを使って民話を読ませた（並行読書）。読書意欲を持続させるために、一人一人に読書カードを持たせ、読んだ本を記録させていった。また、公立図書館との連携を図って、79冊の民話を借りてきて、教室前廊下の民話コーナーに設置した。読書への興味・関心を高める目的で、教科書教材が終わった段階で、読み聞かせ、アニメーションを行った。ここでは、読み聞かせを行った本でアニメーションをさせた。使用した民話は中国の民話『王さまと九人のきょうだい』で、この本を選んだ基準は以下のようなものである。

- ・ アニメーションにしやすい（ここでは登場人物が多い）民話である。
- ・ 児童が興味をもつような楽しい内容の民話である。
- ・ 視野を広げるため、教科書教材（韓国の民話）以外の国の民話である。
- ・ 教科書教材「木かげにごろり」で話し合った民話のおもしろさ（言葉のおもしろさ、中身のおもしろさ）が理解しやすい民話である。

読み聞かせ後、登場人物のカードを配り、登場順に並べるアニメーションを行った（図3）。児童は意欲的に取り組み、アンケートでは、全員が、アニメーションが楽しかったと答えた。また、アニメーション後、他の民話をもっと読みたいと思った児童が74%（28名）いた（図4）。実際に約3週間の期間で、民話コーナーにある民話を一人平均28冊読んでいた。



図3 アニメーションで使用したワークシート

『王様と九人のきょうだい』は、初めから民話コーナーに置いていたが、読み聞かせ、アニメーションをする前に自分で読んでいた児童は4名と少なかった。しかし、アニメーション後、最終的には学級の76%（29名）がこの本を自分で読んでいた。つまり、読み聞かせ、アニメーションを通して内容を知っているにもかかわらず、児童が「自分で読みたい」と思って手に取り、読んだということになる。このことから読み聞かせ、アニメーションが、本のおもしろさを知るきっかけとなり、児童の読書意欲を高めることにつながったと考える。

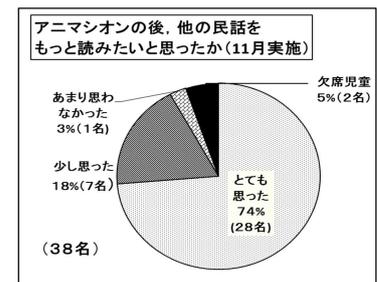


図4 アニメーションについて

以上のことから、ねらいを明確にもって選んだ本による読み聞かせ、アニメーションは、児童の読書意欲を高め、目的に応じていろいろな本を選んで読む力をつけるのに有効だと考える。

#### (4) 児童の変容

目的に応じていろいろな本を選んで読み、自分の考えを伝えることのできる児童を育成するために2つの単元において、紹介したい本を取り上げて説明する言語活動を取り入れた検証授業を行った。これらの実践の前と後で、児童の読書に関するアンケートを比較すると、読書がとても好きだという児童が増えている（図5）。また、授業以外で図書室に行く回数も増えている（図6）。

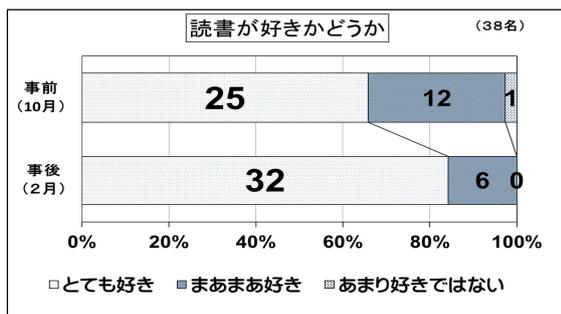


図5 児童の読書への関心

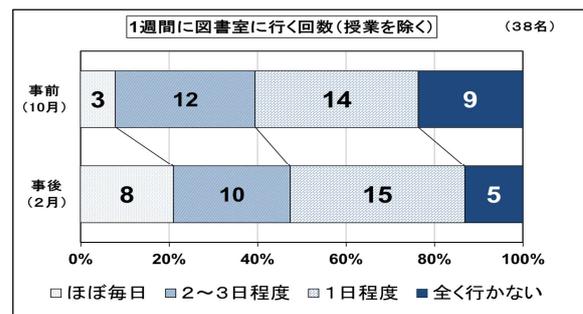


図6 1週間に図書室に行く回数

実際の図書貸し出し冊数を比較しても10月は一人平均10冊だったのに対し、2月は一人平均11.8冊と僅かながら増加している。児童の読書意欲が高まったと考えられる。

また、本の紹介活動についての児童の感想を読むと、たくさんの本を読んだことで、本に対して新たな発見ができた児童が見られた。さらに、国語の学習に対して苦手意識のある児童からも、学習に対して満足感を感じている様子が見られた（資料5）。

以上のことから、紹介したい本を取り上げて説明する言語活動は、自分の考えを伝える力、目的に応じて本を選んで読む力を高めると共に、日常生活において児童の読書に対する興味・関心を高め、読書範囲を広げることができると考える。

- ・ これまで何も気にしないで本を読んでいたけど、民話とか、同じ作家の本とか決めて読んでいくと、おもしろいなあと思いました。
- ・ いろいろな本を読んでみて、作者やシリーズによって、内容が全然ちがうことが分かりました。これからたくさんの本を読みたいです。
- ・ 国語の授業は嫌いだけど、この勉強はとてもおもしろかったです。

#### 資料5 本の紹介活動についての児童の感想

## 7 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究のまとめ

この研究を通して、次のようなことが明らかになった。

- ・ 紹介する観点をつかむための話し合う活動や紹介したいことを書く活動を取り入れ、その後の本を紹介する活動につなげることで、伝えるべきことが焦点化され、自分の考えを伝えることができるようになった。
- ・ 単元のためををつかんで並行読書に取り組みせたり、単元の中に読み聞かせやアニメーションを取り入れたりすることで、目的に応じて本を選んで読むことができるようになった。
- ・ 本を紹介する活動を行うことで、児童の読書に対する興味・関心を高め、読書の範囲を広げることができた。

### (2) 今後の課題

- ・ 紹介する活動における児童相互の評価
- ・ 日常生活において読書意欲の持続や読書力の育成

### 《引用文献》

- 1) 寺井 正憲・吉田 裕久編著 『小学校学習指導要領の解説と展開 国語編』 2008年8月 教育出版 p.90
- 2)3) 村松 賢一 『読書活動の充実』をどう計画するか『教育科学国語教育』 2010年9月 明治図書 p.8
- 4) 岩辺 泰吏編著 『1冊の本が宝島 はじめてのアニメーション』 2003年5月 柏書房 p.16

### 《参考文献》

- ・ 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 国語編』 平成20年8月 東洋館出版社
- ・ 白石 範孝 『白石範孝の国語授業の教科書』 2011年12月 東洋館出版社
- ・ M・Mサルト著 宇野 和美訳 『読書へのアニメーション 75の作戦』 2001年12月 柏書房